THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES

2023年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派) 〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11 TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901 e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp

Facebook http://facebook.com/shinran.bc https://twitter.com/shinran_bc

2023.6

時間的な存在から超時間の

本多 弘之 親鸞仏教センター所長

親鸞仏教センターでは、「現代と親鸞」と題して、 現代の諸問題と親鸞の課題との接点を問題にして きているのだが、そのことは常に新しい時代的課 題を考察の対象として取り上げながらも、一方で 少しも変わらない「親鸞」の地平に立ち続けるこ とでもある。このことを、特に親鸞の仏教の教学 姿勢を学ぶ中において、どのように実践してきた かを考察しておきたい。

まずは、「現代」ということだが、この内容には、 科学の進展に伴う諸問題が押さえられてくるであ ろう。たとえば、エネルギーの多消費による地球 の温暖化に関わる問題等がある。これより派生す る様々な課題も生じてくる。このこと一つをとっ ても、人間が便利さを追求することには、その悪 影響が多面的に生じていることが了解できよう。 進歩・発展として前向きに評価される裏面には、 破壊され崩壊していく地球の自然や人間社会の問 題が必ずあるということである。

急激なネット環境利用の過激な多目的化から は、現代社会に及ぼす限りのない非人間的な影響 も生じている。都市には資本が集中し、建築物が 高層化するが、反面で農村は人口が激減し、村落 は衰亡していく。時代の先端には、確かに合理性 を要求する方向が強く見られる一方で、その動き の速さから置き去りにされる多くの民衆の生活が あるのも事実である。「現代」は時々刻々と変化 しながら、常に人間理性の要求が強烈なパンチを 環境としての地球や人間社会に与えている。

それに対して、「親鸞」の名で問題提起しよう とするのは、いわば時間による変遷の動きとは別 の、動かざる空間とでも言うべき地平のことであ る。「諸行無常」と表現されてきた諸現象、つま りあらゆる存在は変わりゆく時間の中に在るとい う面をもちながら、にもかかわらず超時間的・超 越論的な面を持続してもいる、ということであろ う。

この超時間的な永遠性の方向は、究極的な仏教 の概念としては、一如とか、無為とか、さらには 涅槃とか、これらを含蓄した境界としての法界や 浄土などとして表現されている。親鸞においては、 それを単なる抽象理念にとどめるのでなく、時間 的有限性に苦しむ苦悩の衆生の現実と離れずに、 如何にして超越の方向との接点に立ち得るかが問 われていると思うのである。

この課題を、『大無量寿経』は、「本願」の大悲 の因果として示しているとも言えるのではなかろ うか。そこには、大涅槃を故郷としながらも、濁 世の苦悩の衆生にどこまでも寄り添う「法蔵菩薩」 の「永劫修行」が仰がれているのである。

「難中の難」ということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの―『大無量寿経』を読む―」が昨年の12月、第137回をもって読了した。2023年1月からは親鸞『一念多念文意』の連続講座を開始している。ここでは、「浄土を求めさせたもの」の最終回(第137回)から、その一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一)

「もしこの経を聞きて信楽受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし」(東本願寺出版『真宗聖典』〔以下『聖典』〕、87頁)。有限の身を生きるということを取り巻いてくる因縁が、いろいろ変わってくる。無限に変わりゆく状況に、我々も無限に変わりゆく命を生きている。心も変わりゆく。無限にあり得る因縁が、有限の形を取って我々には与えられる。我々はそれをなかなか受け止められずに、苦しみ抜いてしまう。そういう苦しみが起こるわけですが、そこで本願念仏の催しというものに触れずしては、有限がまた迷わされてしまう。

念仏に触れたということは、ある意味で、光明 摂取の利益に遇ったということです。阿弥陀の心 の光が常に護っている。常に光が護っているとい うことを、我々はいただいているのだと言いなが ら、我々はそれを忘れてしまう。「煩悩眼を障え て見たてまつるにあたわずといえども、大悲惨 ことなくして常に我が身を照らしたまう」(『聖 典』、222~223頁)という源信僧都の教えの言葉を、 親鸞聖人は『教行信証』の信巻で引文されていま す。信心を得ていても、我々は忘れる。忘れて生 きてしまっている。これが現実の有限性を生きて いる凡夫の実相です。

我々からすると自力の思いがまた復活してし

まって、自力で切り抜けていこうとするものだから、その自力の思いには大悲の光は見えない。けれども横からはたらく、こう言わざるを得ないような大悲のはたらき方がある。見えない形でもはたらいているということに気づかされる。これに気づく縁が南無阿弥陀仏で、大悲が有限になってはたらいている。名号のはたらきは、無限がはたらくという意味をもっているから、無限が有限を転じて、無限の心に直していく。けれどもまた我々は大悲を忘れて有限の心を生きてしまう。だから名号を一回称えたらそれで済んだとは言えない問題が常に起こっている。

だから、念仏を信ずるといっても、一回称えたらいいとか、多く称えなければならないとかというのではなくて、念々に煩悩とともに生きているというところに、念々に称名がはたらいてくる。そういう形で「難中の難」という問題もある。難があるけれども自分は乗り越えた、簡単にそうはなれない。「難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし」。どこまでも凡夫であるという困難性。如来の大悲からすれば、困難でも何でもないけれども、我々凡夫では凡夫性を抜けることはできない。だから念々にこの本願他力の催しに触れて目覚めていく。そういうことが教えられているのだろうと思うのです。

これまで『無量寿経』を私のつたない了解で拝読させていただきました。親鸞聖人の教えを明らかにするべく、本願の文をできるだけ丁寧に読みほどいてみようかと思って始めたことでありました。長い時間がかかりましたけれど、いったんここで『無量寿経』の文章の理解という形では終わらせていただきたいと思います。

公開講座2022報

2006年度に「公開輪読会」として始まった本講座は、 当センター研究員の学びを公開し、聴講者の方々と共有 する場として開設された。私たちが生きる現代との接点 を探りつつ、広く仏教について課題としてきた。

本年度は、共通テーマを「交差する世界――浄土と穢 土」として、「浄土」についての学びを深めた。浄土は、 彼岸とも言われ、遥か彼方の世界として説かれることも あるが、また浄土を通してこの我々の世界(穢土)、私 たちの足下が確かめられてきた伝統もある。浄土という 共通の課題のもと人間存在について、各講座で様々な視 点から議論がなされた。

本年度の新たな試みとして、12月講座では、「往生と は何か」を全体テーマに掲げ、当講座を3人の研究員 によるオムニバス形式で行った。浄土と私たちはどのよ うに関係するのか。このことが「往生」という言葉のも とに思索されてきた。「往生」について多角的な視点か ら思索することを目的に、3人の研究員による問題提 起を行ったものである。この12月講座の報告として、 ここに加来雄之主任研究員、中村玲太嘱託研究員、青柳 英司嘱託研究員による報告記事を掲載する。

次いで1月は、谷釜智洋研究員による講座が行われ た。雑誌『精神界』の特に「浩々洞註」に注目し、浩々 洞という「共同体」による浄土の捉え方に迫ったもので ある。

最終の2月講座は、宮部峻研究員が行った。親鸞思 想とそれを検討した社会学者を取り上げ、浄土の論じ方 について新たな角度から検討する講座となった。

以下に両講座についてもその一端を報告する。

〈無量寿経〉の根本関心

一 国土に生まれる 一

親鸞仏教センター主任研究員 加来 雄之

仏教の歴史の中に、なぜ安楽国土に生まれるこ とを説く経典が誕生してなくてはならなかったの か。ある経典の出現の背景と目的は、その経典自 身の序分と流通分に刻印される。すべての〈無量 寿経〉の序は、大聖世尊の光明に驚きをもった阿 難の問いと世尊の応答からなる。その阿難の問い は、「みずからが如来に値遇している事実の深さ (仏仏相念の世界) をどのように受けとめればよ いのか」である。正宗分の、法蔵菩薩の発願修行 の物語も無量寿仏の成仏や仏土荘厳の内容も、そ の仏土に生まれる方法や利益もすべての教説は、 この阿難の問いに答えている。それは何人かの識 者が主張する衆生や修行者の死後の不安に応える ものでは決してない。

天親菩薩は〈無量寿経〉の根本関心を純粋なる 「願生 | 者の実現にあるとする。〈無量寿経〉の異 本の中の一つ『大無量寿経』の決定的な意義は、 この願生の原理を如来の「欲生」として言い当て たことにある。このことによって往生が、他世界 への死後転生でなく、如来の世界への生まれであ ることが明確となった。さらにはなぜすべての〈無 量寿経〉に、命終を契機としない生まれ方、命終 を契機とする生まれ方、その二つを区別する疑惑 を契機とする生まれ方という三つの生まれ方が説 かれているのかを問うことができるようになっ た。この〈無量寿経〉の根本関心である「欲生」 への注目が、親鸞に三往生という独自の阿弥陀仏 の国土の生まれ方の体系的理解を可能にしたので ある。以上について本講座で考究した。



現在に"生まれる" 往生思想について

親鸞仏教センター嘱託研究員 中村 玲太

本講座では、「往生」を現生の事実として考究 する西山派祖・證空 (1177-1247) の往生思想を 中心に検討を進めた。特に證空にとっての「(凡 夫の) 往生」とは、「(弥陀の) 成仏」と密接な連 関があり、「成仏」と「往生」は同時であるとさ れる。弥陀が成仏した時に、すでに往生が完成さ れているのだと證空は強調する。ただ注意すべき は、往生が確立した時=他力信心の確立した時に、 弥陀の成仏が完成すると説くのであり、この意味 で弥陀が未だ成仏していない時があるとする。こ れは何を意味するのか。あえて踏み込んで考えて みれば、弥陀が遥か昔に成仏したと仏典で説かれ るわけであるが、弥陀が成仏したことを観念的に 受け止めるだけでは未だ自己の事実とは言えず、 自己のもとに弥陀の成仏を体験することにこそ救 済の実現を見るのであろう。それを弥陀の大悲が 現れる体験として、「見仏」と證空は言う。決し て肉眼や観想念仏の世界の中に弥陀を見るわけで はないが、弥陀のいる世界に値遇するのであり、 「見仏」と「往生」とは同じことだとする。そして、 この「見仏」「往生」が現生に在るとするのが證 空の往生思想なのである。

しかし、一方でどこまでもこの世界は穢土であ り、厭うべき世界であると證空は認識していた。 浄土と穢土という二重の世界を生きる、生きざる を得ないのが凡夫である。本講座において、この 二重性という視点から「往生」について論じた。



自己の往生/他者の往生

親鸞仏教センター嘱託研究員 青柳 英司

現在、「往生」という言葉は、真宗の中に分断 を生む言葉となってしまっている。往生は現生な のか、死後なのかという問題は、長く議論されて いるにもかかわらず、決着する気配がまったく見 えない。その原因の一つとしては、往生という言 葉で考えられようとしている問題自体が、そもそ も違っているということがあるように思われる。

具体的に言えば、往生を現生とする論者の基本 的な関心は、「救済の現在性」にあるように見受 けられる。往生が死後のことであるならば、今、 現に生きている私の救いにならないのではないの か。このような問題意識が、根底にあるように感 じられる。つまり、自分自身に実現する救済とし て、往生という教言を受け止めようとするのが、 こちらの立場であると言えるだろう。

これに対して、往生を死後(あるいは臨終の時) とする論者の関心は、「死」そのものにあるよう に見受けられる。自分自身にとっての死もそうだ が、特には他者の死である。浄土教には、往生と いう言葉で死者を受け止めてきた伝統がある。し かし、救済の現在性を強調し過ぎると、浄土教は 死者を受け止められなくなるとするのが、こちら の立場であろう。

以上のように、往生の問題に関しては、そもそ も問題関心自体が異なっており、そのため議論が 噛み合わなくなっている一面があるように思われ る。そこで本講座では、①「救済の現在性」と、 ②「死者の捉え方」という二つの問題を、往生と いう言葉を使わずに、親鸞の著作に尋ねることを 試みた。これによって、往生の議論から生じた分 断を埋める方途を模索することが、本講座の目指 したところである。



浩々洞における浄土 - 「共同体」による経文解釈に着目して― 親鸞仏教センター研究員 谷祭 智洋

本講座では、雑誌『精神界』誌上に創刊号(明 治34年)から第2巻第12号(明治35年)の間、「浩々 洞註」という共同体の名で公開された経文註釈の 論稿を取り上げた。「浩々洞註」という名のもと 掲げられた経文註釈の論稿は、「浄土三部経」に こだわることなく多様な経典が採用されている。

講座では、真宗門徒にとっておそらく最も馴染 みのある経典、『仏説阿弥陀経』の経文が註釈さ れた「仏の御名」と「如来の名によれる再生」と いう題目の論稿を取り上げた。前者は『仏説阿弥 陀経』のいわゆる「讃極楽浄土―正報」段、後者 は「勧念仏往生―往生因・往生果」段を註釈した ものであり、両者ともに"名号"に焦点があてられ た論稿であった。

特に後者の「如来の名によれる再生」では「如 来浄土の門は、如来の与へ給ふ鍵によらずは、永 劫開かる、こと」はないと言い、「信仰」によっ てのみ「浄土の門」は開くと述べている。信仰と は「唯如来の救済を覚得する」ことと言い、「覚 得する」には「如来の名を聞くに在り…如来の名 の意義を領得する」と、名号こそが浄土往生の要 というように論が展開されている。また、「浩々 洞註」の名で公開された論稿は、従来の解釈を踏 襲しながら、その当時の「現代」の言葉をもって 論が展開されているようにも見受けられる。質疑 を通じてこれら諸論稿が「共同体としての見解」 と述べるには検討すべき多くの課題があることも 明らかになる講座であった。



社会学と親鸞

一浄土の論じ方一

親鸞仏教センター研究員 宮部 峻

本講座は、「社会学と親鸞」と題して、ロバート・ ベラーと大村英昭の親鸞論に注目し、社会学にお ける親鸞の語り方、浄土の論じ方を取り上げた。 親鸞の思想は、近代知識人の関心を惹きつけてき た。社会学者のなかにも親鸞の思想に魅了された ものがいる。彼らは、親鸞の思想を通じて、現代 社会の問題を批判的に検討しようとした。しかし、 1980年代以降、社会学者で親鸞の思想を語るもの はほとんど見られなくなる。一体なぜであろうか。 本講座では、親鸞、浄土真宗に対する社会学の関 心がなぜ失われたのかについて、歴史学者のアン ドリュー・バーシェイの言葉である「プロテスタ ント的想像(力) |というキーワードから考察した。

戦後社会学において親鸞の思想、浄土真宗を取 り上げた代表的な著作の多くは1950年代から1970 年代にかけて出されている。いずれも戦後社会学 を代表する日本社会論の古典であり、親鸞、浄土 真宗を起点に日本社会の近代化の要因を探究した ものである。ロバート・ベラーの親鸞論は、プロ テスタンティズムをモデルに超越的な阿弥陀信仰 とその信仰に支えられる自律性に注目し、親鸞、 浄土真宗が近代市民社会に適合的な宗教であると 評価した。それに対して、大村英昭は、1970年代 以降に問題となる近代社会の負の側面を踏まえ、 プロテスタンティズムを下敷きにした人間像の限 界を指摘し、民俗信仰と結びついた浄土真宗の姿 を発見しようとした。

思想が語られる時代状況を踏まえて親鸞論を再 評価していくことが、それまでの親鸞論の限界と もう一つの親鸞論の語りにつながっていくであろ う。その出発点に立つのが本講座であった。



むくべしとなり。

並くべしとなり。「専修専念之行」自此漸弘 無智無才のものは、浄土門におも智浅才之類 振臂赴浄土之門」というは、無智無才のものは、浄土門におもにて、破戒無戒の人、罪業ふかきもの、みな往生すとしるべしとなり。「然則破戒罪根本でしとなり。「専修専念之行 自此漸弘 無間無余之勤」というは、一向というは、聖人は善導和尚の御身として称名の一行をすすめたまうなりとし

語註

幹とし、帰すべき依り処とする。土門としての一宗の名。『浄土三部経』に説かれる阿弥陀仏の浄土を教えの根浄土宗:源空(法然)が『選択本願念仏集』で明らかにした、聖道門に対する浄

ると、 能もないものは、浄土門へ向かっていくべきだというのである。 だというのである。「下智浅才之類 振臂赴浄土之門」とは、智慧がなく才 立っていない人、罪が深い者も、皆、真実報土に往生すると知っておくべき 罪根之輩 聖人の勧めによりひろまると知っておくべきだというのである。「然則破戒 間無余之勤」とは、本願の名号をただ一筋に称え念じるということは、 如来の使者として、念仏の教えという唯一の法門をひろめてくださると、知っ らわす言葉である。「為釈尊之使者弘念仏之一門」とは、源空聖人は、 ことを「我が大師聖人」と仰ぎ、生きる依りどころとなさっていることをあ くべきだというのである。「然我大師聖人」とは、聖覚和尚は、源空聖人の 筋に称え念じるという信心を得ているので、真実報土に往生すると心得てお いうことで、浄土に備わる本来の法則によって、戒律を破る人、戒律が成り ておくべきだというのである。「為善導之再誕勧称名之一行」とは、 なまけ怠るばかりのものであったとしても、本願の名号・南無阿弥陀仏を一 人は、善導和尚その人が現れたかのように、称名念仏の一行を勧めてくださ 知っておくべきだということである。「専修専念之行 加肩入往生之道」とは、「然則」は、然るべき結果に至らせると 自此漸弘 源空聖

現代語化をめぐって

聖覚の銘文にある「然則」について、もとの文で「しりかし、なぜ親鸞は、「然則」という言葉を対応させらいにて」と解釈している。「然」は、「しからしむ」というである。もとの『聖覚法印表白文』の訓読では、親鸞自特である。もとの『聖覚法印表白文』の訓読では、親鸞自特である。もとの『聖覚法印表白文』の訓読では、親鸞自特である。もとの『聖覚法印表白文』の訓読では、親鸞自特である。もとの『聖覚法印表白文』の訓読では、親鸞自特である。もとの『聖覚法印表白文』の訓読では、親鸞自特である。もとの『聖覚法印表白文』の訓読では、親鸞自持である。という言葉の親鸞の扱いは独聖覚の銘文にある「然則」という言葉の親鸞の扱いは独聖覚の銘文にある「然則」という言葉の親鸞の扱いは独聖覚の名文にある。

かればすなわち」と読んでいたものを、この銘文の解説で

れていくわけがない等の疑念があったことだろう。親鸞は、「自然の法則」という意に読み替えているのか。ここをどう読み解くのかが現代語化のポイントである。当時も恐らく、称名念仏を勧めたことによって、破戒の主に備わる自然の法則によって、破戒と結ぶという意図があるように思われる。すなわち、もとをどう読み解くのかが現代語化のポイントである。は、「自然の法則」という意に読み替えているのか。ここは、「自然の法則」という意に読み替えているのか。ここれ、「自然の法則」という意に読み替えているのか。ここれ、「自然の法則」という意に読み替えているのか。ここれ、「自然の法則」という意に読み替えているのか。ここれ、「自然の法則」という意に読み替えているのか。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 菊池 弘宣)

聖典の試訳 (現代語化)

『尊号真像銘文』 末巻

8

「聖覚和尚の銘文」 2/3

ている。その冒頭の一文に、源空(法然)が明らかにした (「わが浄土宗」) と言い、自身の真の依りどころを表明し 天台宗の学僧で法印という最高の位にありながら、「我宗 「宗」を焦点とする、まさに宗教の問題である。聖覚は 親鸞が信頼した先学、聖覚和尚。その銘文の第二段落は

この銘文の解釈でも、親鸞は、浄土の宗、すなわち要は、 宗聖典」、一五二頁取意)と、立教開宗に通じるものを示す。 経』であり、その宗致は如来の本願だ(東本願寺出版『真 浄土宗の核心が込められていると思われる 親鸞は、『教行信証』「教巻」に、真実の教は『大無量寿

> いる、と教えてくるのである。 というところに、その決着点がある。それは、私たち一人 如来の本願であると見極める。そして、「無上菩提にいたる」 一人が、如来の本願を信じ称名念仏するところにかかって

時を超えた親鸞からの呼びかけだと受けとめたい。

【原文】

法印聖覚和尚の銘文

(中略)※中略部分は『親鸞仏教センター通信』第八四号に掲載

専念実易勤。雖非多聞広学 信力何不備 乃至 然我大師聖人 為釈尊之使者 弘念 始知。然則破戒罪根之輩 加肩入往生之道 下智浅才之類 振臂赴浄土之門。(後略)_ 仏一門。為善導之再誕 勧称名一行。専修専念之行 自此漸弘 無間無余之勤 在今 ·然至我宗者 弥陀本願 定行因於十念 善導料簡 決器量於三心。雖非利智精進

釈尊之使者弘念仏之一門」というは、源空聖人は釈迦如来の御つかいとして 聖覚和尚は、聖人を、わが大師聖人とあおぎたのみたまう御ことばなり。「為 というは、智慧もなく、精進のみにもあらず、鈍根懈怠のものも専修専念の とおしえたまう。善導和尚の御おしえには、三心を具すればかならず安楽に 念仏の一門をひろめたまうとしるべしとなり。「為善導之再誕勧称名之一行」 信心をえつれば、往生すとこころうるべしとなり。「然我大師聖人」というは、 うまるとのたまえるなりと、聖覚和尚ののたまえるなり。「雖非利智精進」 本願の実報土の正因として乃至十声・一声、称念すれば、無上菩提にいたる 「然至我宗者」というは、聖覚和尚ののたまわく、わが浄土宗は、弥陀の

【現代語】

法印聖覚和尚の銘文

(中略) 原文参照

弘念仏一門。為善導之再誕 勧称名一行。専修専念之行 自此漸弘 無間無余之 勤 在今始知。然則破戒罪根之輩 加肩入往生之道 下智浅才之類 振臂赴净土之 進 専念実易勤。雖非多聞広学 信力何不備 乃至 然我大師聖人 為釈尊之使者 「然至我宗者 弥陀本願 定行因於十念 善導料簡 決器量於三心。雖非利智精 (後略)」

とは、智慧もなく、ひたすら仏道精進するというものでもない、ただ鈍く、 量寿経』に説かれる「三心」をそなえれば、必ず安楽浄土に生まれるとおっ らわした我が浄土宗においては、阿弥陀如来の本願の誓いが成就した真実報 しゃっている」と、聖覚和尚が述べておられるのである。「雖非利智精進」 称名念仏すると、この上ない仏のさとりに至る、とお教えになる」と。また、 土の正因として、たとえ十声あるいは一声でも、我々衆生がその本願を信じ 「善導和尚の教えで言えば、「至誠心・深心・回向発願心」という『仏説観無 「然至我宗者」とは、聖覚和尚のおっしゃるには、「源空(法然)聖人があ

親鸞仏教センター新スタッフ紹介

研究員 大胡 高輝

1992年静岡県生まれ。東京大学文学部卒業。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。静岡 県立大学非常勤講師。近年の論文に、「三願転入をめぐる予備的考察――仏語への視線」(『倫理学紀要』 第28輯、2021年)、「三願転入の前提――親鸞の衆生像と『観経』読解」(『実存思想論集』第35号、2020年) など。

研究員 徳田 安津樹

1991年東京都生まれ。東京大学文学部卒業。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在籍中。東京純 心大学、早稲田大学高等学院、鎌倉女学院中学校・高等学校、各非常勤講師。近年の論文に、(翻訳)「ヤー コプ・ベーメ『鍵』本論第9章」(『東京大学宗教学年報』第38号、2021年)、「神の「測定」について― ―クザーヌスの「知ある無知」と数学的神学」(『パトリスティカ――教父研究』第20号、2016年)など。

嘱託研究員 繁田 真爾

1980年山口県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博 士(文学)。東北大学研究員。日本大学、明治学院大学、中央大学、東京医療保健大学、各非常勤講師。 単著に、『「悪」と統治の日本近代――道徳·宗教·監獄教誨』(法藏館、2019年)。近年の論文に、「「感化」 と「懲戒」の監獄史」(『歴史評論』第876号、2023年)、「方法としての〈清沢満之〉の可能性――「悪」 と近代への問い | (『現代と親鸞』第35号、2017年)など。

事務嘱託 兼 嘱託研究員 古畑 侑亮

1990年長野県生まれ。筑波大学人文・文化学群卒業。一橋大学大学院社会学研究科総合社会科学専攻博 士後期課程修了。博士(社会学)。神奈川大学非常勤講師。近年の論文に、「明治初年における国学者の 文献考証と遺物認識――井上淑蔭の石剣研究」(『考古学ジャーナル』 第770号、2022年)、「明治初期の 旧旗本領におけるネットワークと歴史意識――佐久間家の旧知行所を事例として」(『人民の歴史学』第 230号、2021年)など。

嘱託研究員 宮部 峻(前研究員)

雇員 (RA) **谷釜 智洋** (前研究員)

あとがき

常勤研究員の任期満了後、嘱託研究員の任を拝しながら、おしぼり、タオルの洗濯・梱包工場に丸一年だけ働き、 洗濯と乾燥の日々であった。夏は容赦なく体力を削り冬は 1 番の友人である乾燥機の熱は、今も忘れない。そし て休憩中にはよく仏書、研究書を読んだ。学問と仕事とのオンオフを考えてむしろ選んだ工場勤務であったが、仏 教思想について思いを巡らすことに抗えなかった。私が触れる場を分け隔てようとしても、現実の中に現実を超え るものが働いているのであるから、その隔たりを優に超えてきてしまうのであろう。そうした働きを忘れているこ とに気づかされつつ、変わらぬものに触れて少しの勇気を得た気がする。◇2014年に着任した親鸞仏教センター から異動となり、この4月に教学研究所助手の任を拝命しました。環境が変わる不安もありますが、私の思いや 環境を超えて働く本願力を信じ、求めていくしかないのでしょう。本願力に甘え、忘れてしまう自己を常に自覚し ながら。 (中村玲太)